

臺中乙



「壺中天」とは、別世界、仙境の意で中国後漢の時代、市中に薬を売る一老翁が、売り終われば店頭に懸けた壺中に入った。これを見た費長房が翁を訪ね、ともに壺中に入って飲んだという故事に基づく言葉である。

歌集

壺中天

(創作社叢書第八〇篇)

定価 二〇〇〇円

昭和四十七年三月一日 印刷
昭和四十七年三月十日 発行

著者 高橋俊人

発行者 小林二郎
印刷所 株式会社信陽堂

発行所 浦和市高砂三ノ六ノ九
社

複製
不詞

藤沢市川名一の八の一二
電話 〇四六六二五六三三番
振替 横浜 二六八〇番

松本順は軍医松本良甫の家をつぐ西洋医法を究め將軍の侍医となり軍医總監に上り貴族院議員となる大磯海水浴場は其創設にまつ明治四十年に卒す、大磯町民其氏を思い町葬となす。

序

岡田章雄

古い大学ノートの間から色あせた便箋に細々と書いた手紙が一通出てきたが、それは終戦の前の年の五月に信州伊那の疎開先で高橋先生に宛て、近況を報告するつもりで書いたまま何かの都合でついに投函しなかった手紙であった。

高橋先生 「水牛と闘ふ男」の美しい絵はがきのおたより四月三十日付のものを史料から回送してやうやく本日（五月二十三日）拝見いたしました。有難うございました。山脇を御やめになった由、今度はお近くのところは何よりです。東京の交通不便な不愉快な焼跡に行かなくてすむだけでもよろしいと存じます。お身体の方何卒御無理なさらぬやうにおねがひします。早く戦禍がおさまって、ゆっくりも一度穏かな日をむかへるまでお互に無事でありたいと念じて居ります。

前の便りでも申上げましたが五月一日に伊那谷にはいりました。まだ寒さがつよいので囲爐裏の火が恋しく山々の残雪がくつきりと青空に描

き出されているのも冷く感ぜられます。史料編集所の書物を疎開させおさめた土蔵の白壁の前のせまい八畳の座敷で筆写の仕事など始めて居ります。昔の僧院の生活を思はせます。せまいながら畑の開墾もやって文字通り晴耕雨読、もっとも配給生活では少し腹にこたへます。

本はかなり志村において来てしまひました。岩波文庫も荷物の中に入られるだけつめました、それでも涙をのんで別れて来たものが沢山あります。飯櫃の隅からアーピングの「アラングラ物語」が出て来たり、鏡台の中から「北京年中行事記」があらはれたり、さては鏝節の箱の曳出しからプーシキンの「ペールキン物語」が丸まって姿を見せたりして、さて本棚に竝べてみると、ともかく読みなほして見たいものが相当疎開出来たことをよろこびながら、これから暇にまかせてゆっくりと繙いてみたいと、鋤をふるって桑の根っこを掘り起こして疲れて草の上に横になりながら、フランスの「昔がたり」の短かいコントを二つ三つ読んで休息をとるなど、のんびりとした暮しにかへりました。東京はその後一ヶ月、あの怖ろしかった十四日の暁にみんな灰にしてしまったと諦めた

本が、全部と慾はいはないまでも大切なものはいくらかでもかうして無事に戦火から救ひ出したことを感謝しています。プルーストの「スワンの恋」バルザックの「従妹ベット」「滑稽譚」ラブレールの「ガルガンチュア物語」それから「煙草」（パウル・イングランド著「煙草の歴史」）

――専門のものは別として撰りぬきの佳書を眺めていると、何か落付いた気持がしますが、まだあれも欲しかった、これも惜しかったと慾が湧いて来るのはやむを得ません。近代劇全集やチェーホフなどもその中にあります。近代劇はそれでも一番好きだったヴィルドラックとモルナーと辛うじて二冊ぬいて来ました。僕は太平広記をもっていて、時々勝手なところを拾ひ読みするのが楽しみだったので、あればかりは一冊二三冊ぬいてもって来るのも困るやうな気がしておいて来てしまひましたが、時々よみたいと思ふことがあります。白文では苦手なのでやはり選擇に洩れてしまったのですが、ああいった本格的なものは、こんな僧院のやうな生活の中でゆっくりと味ふと面白いのではないでせうか。読むばかりでなく、少しは書く方も心がけようと、暇の折には空襲の日

日の想ひ出を手記したり、つぎの著作の計画に耽ったり、翻訳をはじめたり、このところいろいろ手を出しかけましたが、どうも飽き易くてつひ子供と遊んだり山へ行ったりする方が忙しくなるので、夜も早寝になってしまひます。

大正の末ごろ浦和の中学で先生から指導を受けた私は、ただ通り一遍の国文や漢文を習ったばかりでなくひろく中国文学やドイツ文学の面白さを教えていただいた。教室で話されるオバケの話は級友たちをいつも喜ばせたが、それは私にとっては幻想小説や怪奇文学、SFの世界への扉を開いて下さったことであり、また童話的発想を身につけるのに大いに役立った。ヨーロッパ文学ことにあまり読まないイタリヤやスペインの作品の楽しさもはじめて知ったし、近代劇の醍醐味に触れることができたのも先生のお蔭である。先生は稀に見る視野の広い読書人であると同時にすぐれた文人で、創作活動にもりっぱな作品を発表されていたので、私たち仲間
の文学少年たちの憧れだった。現在ものを書く商売にはいつて時々まとめ

る著書などをまず先生の許に差上げるのだが、そのたびに、そのころ教室で苦心してまとめた作文や、仲間といっしょに作ったガリ版の同人雑誌に発表した作品の批評をうかがったころに戻った想いがするのである。

この飯島村といふところは可成教養の高い村で立派な村史が出来ています。郷土史に対しても少し興味をもって暇が出来たら少しはそんな方面にも手をつけて見ようと思つていますが何しろいま時郷土史などといふ迂遠なことは増産とか勤労とかの大きな声に掻き消されて誰も注意をはらっていないようです。このごろ空襲におびやかされないのだから鈍感になりました。ラジオや新聞なども手を伸ばせばとどくところであり乍らも無性に恋ひしいと思はず、世灯の情勢にも大分疎くなって来ました。食べるものが乏しいのでよく山へ行って蕨をとって来るのですが、奥山で、白樺の林のかげから、B 29が白い雲をひいてとほって行く姿などみていると、（あまり大きな字では書けません）敵ながら一寸声をかけたいやうな錯覚をおこすことがあります。確かに錯覚らしい

ですが、いずれにしても早く戦火がおさまればよいと、雑炊を啜り啜り話し合って居る次第です。

疎開者の生活といふものも良い小説の題材になりさうです。いろいろ都会と田舎との戦争に対する認識のくひちがひがあります。これをもしバルザックの筆をかりて克明に書きあげたらすばらしい作品が生まれると思ひます。この間山の修鍊道場で鎮座祭がありました。その後で餅をまいて参列の人々や学童たちが重なり合って拾っていましたので吃驚しました。いろいろな場面をつなぎ合はせて、良いモンタージュを仕上げる。とすばらしく諷刺的な作品になりさうです。

歴史に対する先生の情熱はひとのよく知るところだが、私が歴史学の道を選んだのも先生の影響によるところが大きい。歴史といっても世界にひろがるいわゆるキリシタンや南蛮紅毛の歴史には夢がある。先生のそのゆたかな夢がいつか私にのり移って、とうとう私はその分野を専攻する身になってしまった。「三浦按針」の伝記をまとめた時には、横須賀の按針塚

の近くに住んで居られた先生に案内をしていただいたり御指示を得たりしたし、また鎌倉におこった「幕末英人殺傷事件」を調べた際には、幕末の鎌倉や程ヶ谷のことですらいろいろと教えて頂いた。先生は私にとって常によき師匠であるけれども、先生にとって私は必ずしも立派な弟子ではない。私は自分のわが儘から歌の道を離れ、ついに先生の歌人としての輝かしい足跡をたどることができずに今日に及んでいる。しかし読書人として、文人として、また学者としての先生の眞面目を知る数少ない弟子の一人として、そのわが儘を宥して頂ければ幸である。

壺中天 跋

私は、代々医者の家の、しかも長男に生まれた。母方の系統が医家なので、それについての誇りも持って居たが、父の方は農家の出で、政治家としてその思うままの一生を送った。そんな家柄であるから、私も、医師と限らず、何に成ってもいい家に生まれたという事にもなる。

しかし、別に変った考えも持たず、家の指南に従って、小学校を卒えりと東京へ出て、独逸協会中学に入學した。しかもそれが、家を一軒借り、家の者を一人付けて、弟と一緒に過ごすという贅沢な中学生としてである。比の頃の独協には、どういう訳か、文学に関係する人の子弟が多く集まって居た。

佐山清・石川悟郎・平井博（啓朔）・佐藤秋雄・土屋白舎・伊藤彌太郎・高橋寿康・高阪義之等々が、互いにおだやかに同級生となった。

しかも、そのいずれもが、独逸語を一心に勉強し、文学への眼を開いて行った。こうして、今考えても驚くような、質の高い文学少年の接触が始

まったのである。

同級生中、現存するのは、語学者の高阪、文学者の高橋寿康など数名に過ぎない。私でも記録して置かぬと、当時の事がはっきりしなくなる虞れがありそうだ。

それはともかく、その頃の事である。

父が、「壺中天」と書かれた横額と、鍾馗の図の掛軸を出して、「お前はどっちの方面をやる。」とだしぬけに聞いた。勿論、難しい事は判らぬが、なんとなく無意識に、「壺中天」を指して見せた。父に、「そうだ。お前の身体ではそれがよからう。」と言われて、それが私の一生を支配するように成ってしまったのである。この額も軸も、松本順先生の筆で、殊に、鍾馗の軸には、「高橋氏の麒麟児にあたふ」との言葉も添え書きされていた。

松本先生は、下総佐倉の人で、佐藤泰然の第四子に生まれ、松本良甫の家を嗣いだ。西洋医学を究め、明治時代の陸軍軍医総監、勅選貴族院議員であり、大磯海水浴場の創設者としても知られているが、維新前には、将

軍の侍医であつたため、新選組との関係も浅からぬものがあつた。私が、虚弱な体質にも似ず、近藤勇の勇壮に心惹かれる所多いのは、この松本先生が父の師であつた因縁によるのかも知れない。

松本先生からいただいた二点の書画に就いて、父はどう考えたものか、「壺中天」の方を文学に進むもの、「鍾馗」の方を軍人（軍医）に成るものと定めて、私を試したらしい。私は、以来「壺中天」を守つて今日まで来て居る。それがこの書を「壺中天」と名付けたいわれである。

「壺中天」とは、別世界、仙境の意で、中国後漢の時代、市中に薬を売る一老翁が、売り終われば店頭に懸けた壺中に入った。これを見た費長房が翁を訪ね、ともに壺中に入って飲んだという故事に基づく言葉である。

因みに、鍾馗の図は、私のと同形のものが、埼玉県入間野辺りに今でも見られる。「壺中天」も、松本先生の書をそのまま模写したらしい土方歳三の作があるとの事である。

話が少々それ過ぎたらしい。題名の由来はこの辺で止めて置こう。

昨春から、私は病氣のため殆ど床に就いたきりで、再起がおぼつかなく

思われた。それで、「杖家集」後の作を、一卷としてまとめてみた次第である。

本書の成るに当っては、大勢の方方が厚意を寄せて下さった。

殊に、私が大学を出て浦和の教壇に立った時、生徒として接して以来、深い交りが続けて居る岡田章雄君が、心の籠もった序文を寄せて呉れた。

岡田君よりやや下級生になる信陽社主小林二郎君が、出版元として絶大の援助を与えて呉れた。

文末であるが、記して深く謝意を表したい。

昭和四十六年十月

高橋 俊 人

元

旦

炬燵なる母に年賀を申し終へ氷雨の雪に変わり
しを云ふ

闇を截るわがハイヤーに襲ひきて花火の粉の
如し吹雪は

手をのばし妻が眼鏡を取りたるに気付き苦笑
す何時か寝入りし